

草野心平の蛙詩の変遷(五)

——全時代を通じての蛙詩——

西村成樹

草野心平は『第百階級』（昭和三年）以前の習作期^{注1}から最後の詩集『自問他問』（昭和六一年）まで、蛙を扱った作品を書いている（ちなみに、本稿で蛙詩と呼んでいるのは単純に蛙を題材・素材としている作品という意味である）。そして、蛙詩の総数は管見では約一七〇編^{注2}である。心平の全詩数は管見では約一三八〇編^{注3}（『草野心平全集』筑摩書房の目次と、全集以後の八冊の詩集の目次によるカウント）であるから、心平の全詩数に占める蛙詩の割合は約一二パーセントである。蛙という一つの素材・題材を生涯にわたって取り上げて、その割合が全詩業の一割強というのはかなり珍しいことだろう。心平は富士山の詩や、宇宙・地球をテーマにした詩や、庭づくりの詩なども多く創作しているが、第一に蛙の詩人と言わなければならないだろう。

さて、習作期の第一〜第四詩集（『廃園の喇叭』『空と電柱Ⅰ』『空と電柱Ⅱ』『空と電柱Ⅲ』『大正一三年四月』）では蛙は一つの素材、舞台背景にすぎない。しかし、第五詩集（『月蝕と花火』『大正一三年七月』）になると、詩集の序詞に「蛙よ／ 笛をふいて／寂しい月蝕を呼べ／花火をかこんで／青い冷や酒を傾けよう」と書かれていて、蛙が詩集全体のモチーフとなっている。この詩集あたりから、心平は蛙を自己の詩の重要なモチーフ・題材として意識している。第七詩集『踏青』（大正一三年二月）では、蛙は登場人物となり、自律的に動いている。作者は蛙の動作を操り、心情を描写している。そして、そのことは『青蛙事件』のような物語的な展開をもつ作品や、フィクションの蛙詩を生み出している。

次の詩集『第百階級』（昭和三年十一月）は蛙作品だけで構成されていて、作者が本格的に蛙詩を書くように

なっている。収録作品数は四十五編である。習作期の詩集は中国の嶺南大学在学中に書かれたものであるが、これは日本に帰国後に書かれたもので、心平の実質的な第一詩集である。この詩集では現実世界での蛙はほとんど描かれていない。「蛙になる」という作品だけが、人間の語り手が蛙になりきって水に浮かび、その心境を叙述したもので、現実世界を描いたものと考えられる。それ以外はすべて蛙が登場人物となったフィクションの蛙詩である。また、語り手の視点から見ると、三人称で蛙の世界を描写した作品と、一人称で蛙の心情を内面から描いた作品とがある。前者は蛙世界を外側から比較的客観的に描写しようとする視点であり、後者は蛙そのものになった視点である。前述の「蛙になる」は人間である語り手が蛙と同化しようとする作品で、作者心平が蛙の視点を取り込もうとする過程を示している興味深い。詩集の内容としては生き生きとした登場人物の蛙を通して、生の実感・喜び、生のはかなさ、死別の悲しみ、生殖の喜び、愛、自然・仲間との一体感、強者への抵抗などを表している。また、この詩集の特色として、アナーキズム・社会主義の影響を受けて、第百階級の蛙が捕食者や人間（権力者）に闘争を挑むという構図が示されている。ただし、そのような思想性・政治性は以後の詩集では希薄になっていく。また、この詩集では蛙を題材とした図形詩も試みられている。

次に、蛙詩が現れるのは昭和十三年十二月の『蛙』である。蛙だけを扱った詩集で収録作品数は十八編である。アナーキズム・社会主義の影響が見られるのは二編（「だまつてゐた」「寓話」）だけであり、思想性・政治性は薄くなり、生命のはかなくも美しいドラマを描くことに主眼が移っている。「聾のるりる」や「月夜」は生を肯定した温かな人間性が見られる作品である。また、蛙の死の間際を描くことによって、生の尊さや切なさを浮き上がらせた作品などもある（「才母サン」「祈りの歌」）。また、蛙が登場人物として動く、必然的に物語的な展開が多少なりとも生まれてくる。すでに、習作期に物語的な展開は存在していたが、この詩集ではそれがさらに進んで、物語性と抒情性がミックスされた「聾のるりる」や「祈りの歌」のような秀作が生まれている。また、物語することは叙事であるので、必然的に長編詩も生まれている（例「聾のるりる」）。この詩集では、蛙詩が生命への賛歌・愛情・ヒューマニズムという側面を強めていく過程を見ることができ。

次の蛙詩は『日本沙漠』の「Ⅱ章」である。十一編の蛙詩が収録されている。「るるる葬送」のみが当時の敗戦後の社会状況を反映しているが、社会主義のような政治性・思想性を帯びた作品はなく、生命への愛情・ヒューマニズムという傾向がより強くなっている（「誕生祭」「ごびらつふの独白」など）。また、「ケロッケ自伝」「古虎自伝」「ガリピラ自伝」という、亡くなった蛙が自分の人生を振り返って語り、生の尊さとはかなさを浮き上がらせる作品が生まれている。どのように生きたかということ（人生を描くということ）について心平は強い興味を抱いている。心平はこの形式の作品を気に入り、後年にも「く自伝」というタイトルの作品をいくつか書いている。また、これらの作品や「めつかちの由来とその後」などの作品は物語性が強い。また、「めつかちの由来とその後」「誕生祭」などは長編詩でもある。さらに、「誕生祭」ではフィクションの蛙詩の中に作者の私が入り込んでいる。

次の蛙詩は昭和三十九年一月の『第四の蛙』である（昭和三三年十一月刊行の『定本 蛙』は既刊詩集からの蛙詩が収録されたもので触れない）。この詩集も蛙だけを題材とした詩集である。収録作品数は『草野心平全集 第二巻』（筑摩書房）で数えると三七編である。収録作品数が『第百階級』に次いで多いので、内容は多様である。生を肯定したヒューマニズムの作品や、ユーモラスな作品や、作者の日常を描いた作品などがある。生を肯定的にとらえて生き物への愛情を示した作品としては、「冬眠Ⅰ」や「地球に初めて雪の降った日のこと」などが挙げられる。「長命大観音」や「Aコンドル禿の由来」にはユーモアを認めることができる。「そのリアリズムに就いて」「ひなげしとビルン」には蛙とともに、作者と思われる人物の日常が描かれている。「煙」は「クサノシンペイ」という人物が登場したメタ・フィクションの作品となっており、『日本沙漠』の「誕生祭」と同系統の作品である。フィクションの蛙詩と現実の作者の世界の混在は後年の作品でも見られ、蛙詩の特徴の一つである。「天気」「勝手なコーラス」では図形詩が試みられている。「エレジー」は死んだ仲間への哀悼の情を示しており、「白い蛙」は数奇な運命をたどった蛙の孤独・悲しみが描かれている。この二つの作品は物語性と抒情性の調和した秀作である。また、社会主義のような思想性はないものの、戦争を起こしたり、環境を破壊したり

する人間を批判する作品（「長命大観音」）も生まれている。この詩集は『第百階級』のような猥雑な力、型破りな表現はないが、均整のとれた成熟した作品が多く、蛙詩の到達点を示している。

『第四の蛙』以降は、心平は蛙のみを扱った詩集（あるいは詩集の中の一つの章）を刊行していない。各詩集の中に蛙詩が散見するという状態である。『草野心平全集 第三巻』（筑摩書房）には、『こわれたオルガン』（昭森社 昭和四三年）、『太陽は東からあがる』（弥生書房 昭和四五年）、『侏羅紀の果ての昨今』（八坂書房 昭和四六年）、『凹凸』（筑摩書房 昭和四九年）、が収録されている（『四八年のジックザックの―拾遺詩集』（筑摩書房 昭和四八年）は『第百階級』よりも前の作品集である）。この時期は心平六五〜七一歳で、蛙詩は一七編である。

『草野心平全集 第四巻』（筑摩書房）には『全天』（筑摩書房 昭和五〇年）、『植物も動物』（筑摩書房 昭和五一年）、『原音』（筑摩書房 昭和五二年）、『乾坤』（筑摩書房 昭和五四年）が収録されている。心平が七二歳から七六歳の時の詩集で、蛙詩は一六編である。この『全集』第三、四巻の蛙詩には、まず「凡平自伝」（『こわれたオルガン』）、『ゴビドの死』（『全天』）、『ブルアビ自伝』『カリブ自伝』（ともに『植物も動物』）などのように蛙の死を扱った作品が多い。それらには生のはかなさ・尊さや、死という運命に従順な蛙の姿が描かれている。この時期の作者は自然に従って穏やかに死を迎えたいという願望があり、それがこれらの作品に現れていると考えられる。また、蛙の不思議な生態を描いた作品があり、そのような作品は以前からもあったが（例えば、『第四の蛙』の「エレジー／あるあおりがえるのこと」など）、この時期になると、世界の蛙の不思議な生態を取り上げている。「夏眠」（『太陽は東からあがる』）ではアリゾナ砂漠の蛙を、「チチカカの深い湖底を」（『凹凸』）ではペルーとボリビアの国境にあるチチカカ湖の蛙を、「自己紹介」（『植物も動物』）では南米北東部の湖に棲むピパという蛙を、それぞれ描いている。作者の想像力、創作欲が世界の蛙にまで向かっているのは興味深い。また、従来から見られるような、生きることの喜びを描いた蛙詩（「蛙連邦行進曲／ラ・マルセイエーズの曲を借りて」（『全天』）、『三つの満月』（『乾坤』）など）がある。この時期は人間中心ではない自然観、生命観がより

発展している。この時期は心平が自分の死を意識しながら、蛙の生と死を描き出していると言える。

『草野心平全集』（筑摩書房）以後に書かれた蛙詩は約一五編である。それらはまず、フィクションの蛙を描いたものと、現実の蛙を描いたものとがある。フィクションの蛙が登場する豊かな物語世界は蛙詩の醍醐味の一つであるが、この時期のそれらは相対的に平易、簡明で豊穡とは言い難い。また、着想も新しいものはない。現実の蛙を描いた作品は、作者自身の蛙への思いや蛙の習性・生態を詠んだものである。また、フィクションの蛙詩の中に作者の現実世界が介入している作品（「ロブノール」「自画像」「マッ赤ツカ蛙」）が、総作品数に対して多いのも特色の一つである。『第百階級』の「蛙になる」という作品でいち早く蛙の視点を取り入れた心平は、その後、蛙の視点になったり、人間の視点になったりして自由に蛙の作品を書き続けた。生涯にわたって蛙詩を書き続けることができた理由として、彼我（自然と自己）の区別をしないという考えとともに、視点の自由さも挙げられるだろう。また、最晩年の作品であるため、言葉足らずの部分や構成上のつながりが良くない作品なども存在する。

心平は習作期の第一詩集『廃園の喇叭』（タイヤン社 大正一二年一月 心平二〇歳）から既に蛙を素材として登場させている。そして、最後の詩集『自問他問』（筑摩書房 昭和六一年 心平八三歳）でも蛙の詩を書いている。詩人としての出発点から最後まで六三年間、蛙の詩を書き続けたということは非常に稀なことだろう。その間、様々な趣向を凝らして、豊富なバリエーションで読者を魅了したということは評価されてよい。

最後に時期ごとの蛙詩の傾向・特徴を簡単にまとめておく。さらに、詩集ごとに蛙詩と考えた作品のタイトルを列挙しておく。なお、時期の分け方は内容を考慮して分類したわけではなく、便宜的に分類しただけである。

時期ごとの蛙詩の傾向・特徴

◇習作期 心平二〇〜二一歳 心平の誕生日は明治三十六年（一九〇三年）五月一二日

『廃園の喇叭』(大正一二年七月 タイヤン社)

『空と電柱 Ⅰ』(大正一三年二月 空と電柱社)

『空と電柱 Ⅱ』(大正一三年三月 空と電柱社)

『空と電柱 Ⅲ』(大正一三年四月 空と電柱社)

『月蝕と花火』(大正一三年七月)

『BATA』(大正一三年九月)

以上『草野心平全集 第四卷』(筑摩書房) 所収

・蛙詩は一編

・蛙詩の出発点。

・蛙が作品の舞台背景、素材の一つから次第に登場人物・題材となっていく過程が見られる。

◇『第百階級』(銅鑼社 昭和三年一月 心平二五歳)

・蛙詩四五編。

・蛙詩の成立。

・「蛙になる」以外はフィクションの蛙詩。

・登場人物の蛙を通して、生のよろこび・はかなさ、死別の悲しさなど、人生のドラマを描いている。

・第百階級の蛙が権力者に闘争を挑むという構図・思想がある。また、第百階級という底辺で生きる者の猥雑な力や生命力が描かれている。

◇『蛙』(三和書房 昭和一三年一月 心平三五歳)

・蛙詩一八編。

- ・階級闘争を表す思想性は希薄になる。はかなくも美しい生命（人生）のドラマを描くことに主眼が移る。
- ・生命への賛歌という傾向が強い。
- ・抒情性と物語性が深化している。
- ・長編詩が多い。

◇『日本沙漠』のⅡ章（青磁社 昭和二三年五月 心平四五歳）

- ・蛙詩一一編。
- ・政治的、思想的な作品はない。
- ・前詩集に引き続き生命への愛情・賛歌、ヒューマニズムという傾向が強い。
- ・死んだ蛙が自分の人生をふりかえるという体裁の作品（『自伝』というタイトルの作品）が生まれている。
- ・長編詩がある。
- ・フィクションの蛙の世界に作者の私が入り込んだ作品がある。

◇『定本 蛙』（大地書房 昭和二三年二月 心平四五歳）

- ・既刊詩集からの蛙の詩を選んで編集したもの。四五編。

『第四の蛙』（政治公論社 昭和三九年一月 心平六一歳）

- ・蛙詩三七編。
- ・引き続きヒューマニズムの傾向が強いが、収録作品数が比較的多いので、内容はバラエティに富んでいる。
- ・生命への愛情を示した作品、ユーモラスな作品、作者の日常を描いた作品、戦争や環境破壊を行う人間を批判した作品、図形詩などがある。

- ・フィクションの蛙と作者のクサノシンペイが対話する作品がある。
- ・猥雑な力強さや型破りの表現はないが、均整のとれた成熟した作品が多い。蛙詩の到達点と考える。

◇『草野心平全集 第三卷』（筑摩書房）所収の詩集

『こわれたオルガン』（昭森社 昭和四三年）

『太陽は東からあがる』（弥生書房 昭和四五年）

『侏羅紀の果ての昨今』（八坂書房 昭和四六年）

『凹凸』（筑摩書房 昭和四九年）

（心平六五〜七一歳）

（蛙詩一七編）

◇『草野心平全集 第四卷』（筑摩書房）所収の詩集

『全天』（筑摩書房 昭和五〇年）

『植物も動物』（筑摩書房 昭和五一年）

『原音』（筑摩書房 昭和五二年）

『乾坤』（筑摩書房 昭和五四年）

（心平七二〜七六歳）

（蛙詩一六編）

- ・生命への愛情、生の喜びを表す。
- ・死んだ蛙が自身の人生を振り返った「自伝」というタイトルの作品がある。
- ・死という運命に従順な蛙の姿が描かれている（作者が自分の死を意識して蛙詩を書いている）。
- ・人間中心でない自然観、生命観がより深まっている。

- ・世界の蛙の不思議な生態を描いている。

◇『草野心平全集』（筑摩書房）刊行後の詩集の中の蛙詩

『雲気』（筑摩書房、昭和五五年）

『玄玄』（筑摩書房、昭和五六年）

『幻象』（筑摩書房、昭和五七年）

『未来』（筑摩書房、昭和五八年）

『玄天』（筑摩書房、昭和五九年）

『幻景』（筑摩書房、昭和六〇年）

『絲綢之路^{シルクロード}』（思潮社、昭和六〇年）

『自問他問』（筑摩書房、昭和六一年）

（心平七七〜八三歳）

（蛙詩一五編）

- ・従来着想、手法をなぞったものが多い。
- ・フィクションの蛙を描いたものと、現実世界の蛙を描いたものがある。
- ・フィクションの蛙の世界と現実の作者の世界が混在している作品がある。
- ・戦争をする人間を批判した作品がある。

蛙詩のタイトル

『草野心平全集 第一巻』（筑摩書房）所収の詩集の蛙詩 計七四編
『第百階級』 蛙詩四五編

「秋の夜の会話」	「行進曲」
「ヤマカガシの腹の中から仲間 告げるゲリゲの言葉」	「蛙つりをする子供と蛙」
「えぼ」	「第八月満月の夜と満潮時の歓喜 の歌」
「殺虐の恐怖のない平凡なひと時 の千組の一組」	「蛇祭り行進」
「逆歯に死ぬる同胞一匹」	「月の出と蛙」
「おれも眠ろう」	「生殖Ⅰ」
「嵐と墓」	「古池や蛙とびこむ水の音」
「子供に追ひかけられる蛙」	「吉原の火事映る田や鳴く蛙」
「鰻と蛙」	●
「いいのか」	「傀儡と蛙の風景」
「号外」	「無言劇」
「青大将に突撃する頭の中の喚声」	「Nocturne, Moon and Frogs」
「だから石をなげれるのだ／だから石をうけるのだ」	「水素のやうな話」
「蛙は地べたに生きる天国である」	「ギケロ」
「ぴりぴの告白」	「亡霊」
「冬眠」	「霜柱の中で死んだ蛙」
「Spring Sonata 第一印象」	「生殖Ⅱ」
「蛙と蛇と男」	「散歩」
「ゲル」	●
「病気」	「一匹を慕ふ二匹の会話」
「中性」	「蛙になる」
「五本足の男」	「晴天」

『蛙』

蛙詩一八編

「聾のるりる」 「梟と蛙」 「たまごたちのゐる風景」 「さやうなら一万年」 「だまつてゐた」 「月夜」 「let me sleep, too」 「河童と蛙」 「寓話」	「才母サン」 「祈りの歌」 「ひととき」 「蛙」 「梅雨」 「蛙のゐる風景」 「on the tree」 「きちがひ」 「相撲」
---	--

『日本沙漠』のⅡ章

蛙詩一一編

「誕生祭」 「音のない風景」 「めつかちの由来とその後」 「思ひは猛烈な羊齒類のなかに」 「桂離宮竹林の夜」 「小曲」	「るるる葬送」 「ごびらつふの独白」 「ケロッケ自伝」 「古虎自伝」 「ガリビラ自伝」
--	---

『草野心平全集 第二巻』（筑摩書房）所収の詩集の蛙詩 計三七編
『天』 蛙詩二編

「冬眠」 「ぱつぷくどん」

『第四の蛙』 蛙詩三五編

<p>「煙」</p> <p>「エレジー」</p> <p>「Aコンドルの禿の由来」</p> <p>「黒い蛙」</p> <p>「白い蛙」</p> <p>「亡霊は語る」</p> <p>「しまったと今でも思う」</p> <p>「百舌鳥と蛙」</p> <p>「冬眠への夕方」</p> <p>「ぎがむの独白」</p> <p>「決心」</p> <p>「ひなげしとビルン」</p> <p>「散歩」</p> <p>「たまごたちの界限」</p> <p>「おたまじゃくしたち四五匹」</p> <p>「カジカ」</p> <p>「恋愛詩集」</p> <p>「誕生祭讃歌」</p> <p>「ギャランズの空気のなかで」</p>	<p>「そのリアリズムに就いて」</p> <p>「ゴビの蛙」</p> <p>「李太白と蛙」</p> <p>「地球に初めて雪の降った日のこと」</p> <p>「伝令」</p> <p>「蛇を呑んだ蛙」</p> <p>「新氷河時代」</p> <p>「長命大観音」</p> <p>「音楽のように」</p> <p>「五匹のかえる（童詩）」</p> <p>「ひなた雨（童詩）」</p> <p>「天気」</p> <p>「勝手なコーラス」</p> <p>「満月の夜の会話」</p> <p>「3号・スケッチ」</p> <p>「太陽を呑む」</p>
--	--

『草野心平全集 第三卷』（筑摩書房）所収の詩集の蛙詩 計一七編
『こわれたオルガン』 蛙詩四編

<p>「blue zinta」</p> <p>「天」</p>	<p>「蛙の花」</p> <p>「蛙の声明」</p>
--------------------------------	----------------------------

『太陽は東からあがる』 蛙詩三編

「夏眠」
「凡平自伝」

「サリム自伝 蛙・作品第一二一番」

『侏羅紀の果ての昨今』 蛙詩二編

「蛙 蛙作品第一二二番」
「その墓は 蛙作品第一二三番」

『四八年のジツクザツクの ―拾遺詩集―』 蛙詩三編

「春・人物と蛙の風景」
「青い水たんぼ」

「失恋者と蛙」

『凹凸』 蛙詩五編

「幻の水の原で」
「チチカカの深い湖底を」
「キシミみなゆるみて夜の土うごく」

「或る日キリムは次のやうな独り言をつぶやいた」
「死臭」

『草野心平全集 第四卷』（筑摩書房）所収の詩集の蛙詩 計二七編
『全天』 蛙詩四編

「ゴビドの死」
「医道についてびんるは語る」

「蛙連邦行進曲」
「the golden arrow-poison frog」

『植物も動物』 蛙詩八編

<p>「冬眠を終へて出てきた蛙」 「ブルアビ自伝」 「カリブ自伝」 「自己紹介」</p>	<p>「ジコセウカイ」 「会話」 「婆さん蛙ミミの挨拶」 「キリムの星」</p>
---	---

『原音』 蛙詩二編

<p>「或る冬眠蛙の独白」 「鯉と蛙」</p>

『乾坤』 蛙詩二編

<p>「墓」 「三つの満月」</p>

《『第百階級』以前（習作期）の詩集》

『廃園の喇叭』 蛙詩二編

<p>「少女の友はまだ来ないのです」 ※ただし、「蛙よ／まだなきやまないのか」という詩句での使用。 「或る感情」 ※ただし、「時には蛙の世界にのぞきいつたりしている」という詩句での使用。</p>
--

『空と電柱 I』 蛙詩なし

『空と電柱 II』 蛙詩一編

「ある春の日の風景感覚」

※ただし、貯水池から聞こえてくる蛙の鳴き声を「Ru Ru Ri Ri Ri Ri」と記述しているのみ。

『空と電柱 III』 蛙詩なし

『月蝕と花火』 蛙詩四編

扉銘（序詞）

※「蛙よ／口笛をふいて／寂しい月蝕をよべ／花火をかこんで／青い冷や酒を傾けよう」という詩句での使用。

「よつちゃん」

※「ゴム製の蛙のやうなそれでゐて重たいからだ」での使用。

「畦道」

※「ぐるりは いちめんの蛙の声」という詩句での使用。

「痔病患者に」

※「白い魚の眼玉を／おたまじゃくしのように／べろべろとのみたまへ」という詩句での使用。

『BATA』 蛙詩なし

『踏青』 蛙詩四編

「蛙と蛇と男」

「蛙」

「蛙二題」

「青蛙事件」

『草野心平全集』（筑摩書房） 以後の詩集中の蛙詩 計二五編

『雲気』 蛙詩五編

「蜂と墓」

「螢を吞んだ蛙」

「ウチの家でいま。食用蛙がない
てますといふ電話をきいて」

「自画像」

「未知の峰岸敬三に」

『玄玄』 蛙詩なし

『幻象』 蛙詩二編

「げえるツ葉と蛙たち」

「蛙の自稱占師」

『未来』 蛙詩一編

「土のなかでの會話」

『玄天』 蛙詩二編

「二十一世紀の蛙」

「マツ赤ツカ蛙」

『幻景』 蛙詩一編

「アリゾナ蛙の夏眠」

『シルクロード
絲綢之路』 蛙詩三編

「性・性」 「烏魯木齊の風呂」	「ロブノール」
--------------------	---------

『自問他問』 蛙詩一編

「かへるのこはかへる」

注1 草野心平は『わが青春の記』（草野心平全集第九卷）筑摩書房）の中で「世間では『第百階級』という蛙に関するだけの作品集が私の処女詩集と見なしているらしいが、それはそれで構わない」と述べている。ここではそれを踏まえて、『第百階級』より前の七冊の詩集を便宜上習作期と呼ぶことにする。また、深澤忠孝氏は『草野心平研究序説』（教育出版センター）の中の「参の章 詩の道程」の「第一節 習作期の展望―亡兄民平にふれて」で、『第百階級』より前の詩集を習作期の作品と呼んでいる。

注2 蛙詩の総数は以下の通りである。

- 『草野心平全集第一卷』 七四編
- 『草野心平全集第二卷』 三七編
- 『草野心平全集第三卷』 一七編
- 『草野心平全集第四卷』 二七編
- 全集以後 一五編
- 合計 一七〇編

ただし、一概に蛙詩と言っても様々なものがあり、その総数を厳密に数えるのは難しい。「よつちやん」（『月蝕と花火』）という人物を「ゴム製の蛙のやうなそれでゐて重たいからだ」と表現していたり、曼珠沙華を「蛙の花」（『未来』）と表現していたりする。また、「わが抒情詩」（『日本沙漠』）では、「蛙やたとへば鳥などは。／もう考へることをよしてしまつてもいいやうな。」という一文があるが、この部分にしか蛙は登場しない。作品の背景として蛙が用いられてい

るだけである。また、図形詩を蛙詩と呼んでいいのかという問題もある。したがって、蛙詩の総数は概数として示さざるを得ないと考える。

注3 ただし、「いわき市立草野心平記念文学館」のホームページの中の「草野心平の生涯」には「二四〇〇篇余の詩」とある。(http://www.k-sinpei.jp/life.html)

注4 『第百階級』の序詩には「蛙はでつかい自然の賛嘆者である／蛙はどぶ臭いプロレタリトである／蛙は明朗性なアナルシスト／地べたに生きる天国である」とあり、この詩集が社会主義・アナーキズムの影響を受けていることがわかる。また、「蛇祭り行進」や「ヤマカガシの腹の中から仲間告げるゲリゲの言葉」などには、強者・権力者に挑む姿勢が見られる。

注5 『廃園の喇叭』には「少女の友はまだ来ないのです」に「蛙よ／まだなきやまないのでか」という詩句がある。また、「ある感情」には「時には蛙の世界にのぞきいつたりしてゐる」という詩句がある。

注6 『自問他問』には「かへるのこはかへる」という蛙を素材にした童謡調の風刺詩が存在する。